昭和60年(1985年)1月10日　教皇様の声　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)

1　JANUARY, 1985　毎月10日発行　第57号

教皇様の声

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
©1985 精道教育促進協会 ☎(芦屋)三一・三四五二 芦屋市船戸町12—6

力強い聖霊の息吹き

地と地上にある全ての被造物は、聖霊の御力によって神に帰されるものとなる、すべては神により存在しているから。

ご一緒に詩篇を歌いましょう。

「主よ、あなたのみ業のおびただしさ。
地はあなたに造られたもので満ちている。」
(詩篇103(104)・24)

地上を眺め、創造のみ業の測り知れない偉大さを驚嘆しつつ、喜びいさんで詩篇を歌いつづけましょう。

「あなたが……その息を取り去れば、彼らは死に、ちりにかえり、
あなたが息を送れば、彼らはつくられ、
地の面は新たにされる。」(詩篇103(104)・29～30)

創造のみ業はたしかに聖霊の御力によるものです。目に見える世界は、全知、全能、愛であらせられる目に見えない神によって造られました。神は創造の始めに、ご自身の造りだされたすべてのものをごらんになり、よしとされた。このお言葉を、私たちもすべての被造物におくりたいと思います。

「私の魂よ、主を祝せよ。
主よ、私の神よ、あなたは偉大なもの…、
代々に主に光栄あれ。
主がそのみ業を喜ばれんことを。」
(詩篇104(103)・1、31)

刷新

今日私たちは、神のみ業による素晴らしい大聖堂で教会の誕生を祝っています。そしてはっきりと、「主よ、聖霊を送りたまえ、地の面を新たにしたまえ」と繰り返しています。

聖霊降臨の日の高間に集い、祈ります、「主よ、聖霊を送りたまえ、地の面を新たにしたまえ」と。すると実際に、キリストの御母と共に集う弟子たちに聖霊が送られ、地の面を新たにせんがために教会は誕生する。

私たちは自らつくったものの中からパンとぶどう酒をえらび、祭壇へと運びます。あの日聖霊の御力によって誕生した教会は、パンとぶどう酒の外観のもとに現存する救い主の御体と御血、すなわちご聖体によって絶えず生まれ続けていますが、これもやはり聖霊の御力のおかげなのです。

教会誕生の証人

いま、私たちはペンテコステの日のエルサレムの高間にいます。のみならず、本日のミサの典礼により、「復活の日の夜」の高間にも導かれています。集っていた弟子たちは恐れて戸を閉じていたのにイエズスが入ってこられたあの部屋に。

主は、たしかに十字架につけられた証拠として御手と御脇をお示しになり、おおせになりました。『あなたたちに平和！　父が私を送られたように、私もあなたたちを送る。』また彼らに息を吹きかけて、『聖霊を受けよ。あなたたちが罪をゆるす人にはその罪がゆるされ、あなたたちが罪をゆるさぬ人はゆるされない』と。(ヨハネ20・21～23)

復活の日の夜、高間にとじこもっていた弟子たちが受けたのは、その五十日後におくられるのと同じ聖霊でした。そうして聖霊に鼓舞された弟子たちは、教会誕生の証人となったのです。「聖霊によらなければだれも『イエズスは主である』と言うことはできない。」(コリント①12・3)

復活の日の夜、弟子たちは、聖霊の御力を受けて「イエズスは主である」と、心底から信仰を告白しました。ペンテコステの日以来弟子たちが命をかけて証言してきたのも、この真理に外なりません。

信仰の新たな力

「イエズスは主である。」　弟子たちが心の底から信仰を告白したとき、聖霊は彼らにご聖体を委ねました。ご受難を前にしたキリストが高間での最後の晩さんにおいて制定なさったご聖体——主の御体と御血——を委ねられたのです。

弟子たちにパンを与えておおせになりました。「皆、これを取って食べなさい。これはあなたがたのためにわたされる私のからだである。」

それから、さかずきを与え、「皆、これを受けて飲みなさい。これは私の血の杯、あなたがたと多くの人のために流されて罪のゆるしとなる新しい永遠の契約の血である」とおおせになりました。

さらに、「これを私の記念として行ないなさい」と。

聖金曜日、そして聖土曜日が訪れます。最後の晩さんでの神秘に満ちたお言葉は、キリストのご受難を通して成就しました。主の御体は渡され、主の御血は流されたのです。そしてご復活の日の晩、よみがえられたキリストが弟子たちの間に立つ。弟子たちは聖霊の息吹きを受けて新たな力に心を躍らせます。

よみがえられた御方が弟子たちの眼前に立っておいでになる！

イエズスは主である！

イエズスは、「罪のゆるし」のために、パンの外観のもとに御体を、ぶどう酒の外観のもとに御血を、与えてくださった主であります。

主は私たちにご聖体をお与えになる。

よみがえられた御方は今、「御父が私を送られたように私もあなたたちを送る」とおおせられます。

主は「これを私の記念として行ないなさい」とおおせになり、ご聖体のおことばとご聖体のしるしとを、聖霊の御力をとおしてお送りくださる。

「イエズス・キリストは主である。」

主は、ご死去とご復活の秘跡、すなわち、御体と御血の永遠の記念を、弟子たちにお送りになります。イエズス・キリストはつねに主であり、人々の牧者でありますから。

福音を通して生まれかわる

ペンテコステの日、力強い息吹によって教会を誕生させた聖霊は、弟子たちに、高間から出て使命を果たしに行くようお命じになっ

ています。

復活の日の夜、キリストは弟子たちにおおせられました、「御父が私をおくられたように私もあなたたちを送る」と。聖霊降臨の朝、聖霊の御働きで自らの使命を理解した弟子たちは、人々の中へ、世界へと向かって旅立ちます。

その前にこの世界―人間の世界―が「高間に入っていました」。つまり、「彼らはみな聖霊に満たされ、霊の言わせるままにいろいろの国の言葉で話し始めた」(使徒行録2・4)のです。この言葉の賜のおかげでいろいろの言語を話す人々もまた高間に入り、それぞれの言葉で「神の偉大な業」(同上2・11)を宣言する弟子たちの話を理解することができました。

それで、教会はペンテコステの日に力強い聖霊の息吹のもとで誕生した、と言うのです。教会は、ある意味で、いろいろな言語を話す人々の住むこの世界に生まれたと言えます。全世界に行って、全ての国々に、いろいろな言葉で教えを宣べ伝えるために。

教会は、人々と国々に教えを宣べるたびごとに、福音のことばを通して、新たに生まれ変わります。ご聖体の神秘的な力を受け、聖霊の御働きによって、人々の中に生まれ変わるのです。

福音の言葉を受け入れ、ご聖体に現存されるキリストの御体と御血を生命の糧とする人はみな、聖霊の息吹をうけて確信できます、「イエズスは主である」(コリント①12・3)と。

教会はキリストの神秘体

エルサレムでの聖霊降臨の日以来、教会は聖霊の息吹をうけつつ成長しています。

教会における「霊的な賜」、「聖務」、「働き」はいろいろ異なるが、「霊は同じ」、「主は同じ」、「すべてにおいてすべてを行われる神は同じです。」(コリント①12・4～6参照)

教会はふたたび、あらゆる人種、あらゆる社会、あらゆる国々、あらゆる言語、あらゆる民族、あらゆる世代の中に、建てられ、そして成長して行きます。

種々の部分、器官、細胞が一体となって成長するからだのごとく、教会も、大勢の人々がキリストと一つになって成長してゆくのです。

多様性が一致を妨げないことを聖霊は明らかにしてくださいましたが、一致とはもともと多様性を含んでいます。「私たちは……一つの体となるために一つの霊によってみな洗礼を受け、そして一つの霊を注がれた」(コリント①12・13)とある通り。

■教会は、人々と国々に教えを宣べるたびごとに、福音のことばを通して、新たに生まれ変わります。ご聖体の神秘的な力を受け、聖霊の御働きによって、人々の中に生まれ変わるのです。

つねに生まれ、日々あらたになるこの霊的な一致のもといが、十字架と復活の偉大な記念である御体と御血の秘跡なのです。これこそ、キリスト御みずから弟子たちの手に委ね、彼らの使命の基と定められた新しい永遠の契約のしるしです。

教会は、聖霊の御働きのうちに、御体の秘跡によって、一つのからだとして建てられます。教会は、聖霊の御働きのうちに、新しい永遠の契約の血による新しい契約の民として建てられます。

聖霊がお与えになるご聖体の秘跡の生命力は尽きることがありません。教会はご聖体によって、聖霊のうちに、主の生命と共に生きています。「イエズスは主である。」

聖霊降臨の力強い息吹をうけて、このイタリアの地は、二千年近くものあいだ世代から世代へと、神の偉大なみ業を宣言し続けてきました。教会誕生のもといとなったご聖体を声高々に告げてきたのです。

本日、会議の終了を祝って祭壇上の秘跡のまわりに集う今、格別荘厳に、ご聖体を宣言します。信者の方々のためにはご聖体についての公文書が発表されますが、これは司教方が作成し本日発行されたばかりのものです。全てのキリストの共同体が、「ご聖体から、神の愛のあらわれ、兄弟的一致の喜び、そしてキリストと共に世のいのちのために割かれるパンになろうと望む勇気を、汲みとって欲しいとの願いをこめて。」

教会は、ご聖体を通して、神の民の生活の中心となり、その使命の源となります。そしてこの神の民は、いま高間に集い、現代人の言葉を話しています。

ご聖体には、父親、母親、子供、老人、青年、教師、生徒、農夫、労働者、教養のある人、素朴な人、修道者、司祭など、例外なく全ての人間の生活中、もっとも大切なものが刻み込まれています。人間の生活は、ご聖体を通して生ける神の秘義のうちに刻み込まれるのです。永遠の〝生命の書〟と同じように、この神の秘義の中で人は時代の限界を越えて終わりなき生命の希望へと向かってゆきます。託身されたみことばの教会は、ご聖体を通して、永遠のエルサレムの住人を生み出します。

私たちの感謝をお受けください

キリストよ、感謝いたします！

御身は、無に等しい私たちを、聖霊の御力によって、ご聖体において、御体と御血の一致、ご死去とご復活の一致に、あずからせてくださいますから。

Gratias agamus Domino Deo nostro!

キリストよ、感謝いたします！

御身は、教会が地上で絶えず新たに生まれつづけ、永遠から定められた後継者、神の養子となるべく息子や娘たちを生み出すことをお許しになりますから。

Gratias agamus Domino Deo nostro!

ここに集う私たちは聖体大会を通して感謝をささげています。この共同体の感謝をおうけくださいますように。キリストよ！　私たちの中におとどまりください、ご復活の晩、高間に集っていた弟子たちの間においでになったように。もう一度おっしゃってください、「御父が私を送られたように私もあなたたちを送る」(ヨハネ20・21)と。

そしてこのお言葉に、聖霊降臨の力強い息吹をお与えください！

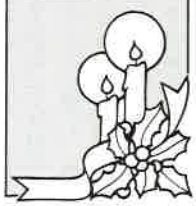
私たちが信仰の心でこのお言葉にとどまることのできますように。

御身が送られるところならどこへでも行きましょう…、御父が御身をお送りになったのですから。

(一九八三・五・二十二、ミラノの聖体大会で)

説教・講話・書簡等の抄訳

神であると同時に人間である救い主



1　クリスマスの秘義を迎えた今、天軍が地を託身に与らせるときの賛歌が、再び耳にこだましてきます。「いと高き所には神に栄光、地には神が愛される人々に平安。」(ルカ2・14)

地上の平和が告げられましたが、これは人間の努力で達成できる平和ではありません。ここでいう平和とは天上からくる平和、神のおくりものです。そこで忘れてはならないことが一つ。それは、私たちが世界の平和のために働くとき、まず、主に全幅の信頼を寄せ、神の平和の贈り物に対し心を充分に開かなければならないということです。

クリスマスの賛歌によれば、地に約束された平和とは、人々に対する神の愛に向けられていることがわかります。それは、神の善意が人々に属するからです。イエズスの誕生は、この善意を反論の余地なく決定的に証明してくれます。しかもこの神の善意が人間から取り去られることはありえません。

ご降誕は和解を望む神のみ旨のあらわれです。神は罪深い世界をご自分と和解させ、罪を赦し、罪を取り除いてくださる。天使はご誕生を告げるときすでに、幼子につけられる名前、つまり神救い給うという名前を教えて、神の和解を望む心を示しました。「御子はみ民をその罪から救う方である」と。(マテオ1・21)　その名前は、幼子の行き先と使命を、その人格とともに、教えてくれています。幼子は、救いの神、人類を罪の奴隷から解き放ち、神との親しい関係を回復してくださる御方であります。

約束を果たす

2　神なる救い主を人類にお与えになったということは、イスラエルの民の期待を遙かに越えた大事件でありました。この民は、救いを期待し、救い主つまり地上に王国を確立する理想の王を待ち望んでいました。イスラエルにとって来たるべき救い主は人間にすぎなかったのです。ところが、この世においでになった救い主を見てわかったことは、その御方が神であると同時に人間であるという事実でした。こうして、イスラエルの民が考えることも望むこともできなかったこと、つまりご託身の秘義が実現しました。約束を遙かに越える事柄が実現したのです。

従って、旧約聖書の啓示だけでは、イエズスの偉大さを充分に測り知ることはできません。イエズスを人間の人格の範囲内で考えようとすれば、新約の啓示の本質を見誤ってしまいます。御子の神的ペルソナが人となられた、あるいは聖ヨハネの言葉を使って、「みことばは人となられた」(ヨハネ1・14)というときの意味がわからなくなるのです。いかにも寛大な神のご計画、というほかはありません。御父はご自分と同じ神であらせられる御子を遣わしてくださったのですから。

召し使いや預言者のように、ご自分の名において語る人間をお送りになったのではありません。御父は最高の愛を人類にお示しになった。神の全能を備える救い主をつかわされましたから。

神であり人であらせられるこの救い主のうちに、和解を実現せんとする神の意図を見ることができます。御父は、人類を浄め、罪から解放するだけでなく、神性と人性の親密な一致をお望みになりました。イエズスの唯一の神的ペルソナのもとに神性と人性が完璧なかたちで一致しています。完全な神であらせられる御方が同時に完全な人間なのです。救い主が人性と神性のこのような一致を実現なさったのは、私たちをもその一致に与らせるため、完全な神であり完全な人である御方が、兄弟である人間に神的な生命を伝えるためでありました。そしてその結果、人間は、自らのうちに神的な完全性を映しつつ、より一層完全な人間になったのです。

3　ここで和解について強調しておきたいと思います。罪に染まった人間は、自分の罪の結果として将来の生活が後退するのではないかと恐れる。しかし救い主キリストは一層完全な人間としての発展を可能にしてくださった。人間は、罪への隷属状態から解放されるだけでなく、罪を犯す前よりもはるかに完全な人間になることができるようになったのです。キリストはずっと高揚された生活を可能にしてくださいました。キリストの神性は人間性を抑えつけるどころか、かえって高めたからです。ご自分の神的な生命で、より完全な生命をお与えになったというわけです。

救い主なる神が人となられたと言っても、神が何かを失われたということではありません。罪のため、傷つき汚れたものすべてが、ふたたび生き、そして成長できるようになりました。これで、キリストの恩寵は人間の能力をフル回転させ人間の人格を確認する、という言葉の意味がおわかりになるでしょう。キリスト教は、人間と神を和解させることによって、すべて人間的なものを育み養います。

私たちもベトレヘムの洞穴に鳴り響いた歌に夢を合わせて、天使とともに声高らかに宣言したいものです、「天のいと高きところには神に栄光、地には神が愛される人々に平和」と。

(十二・二十八)

結婚の倫理　シリーズⅣ

本日は、『現代世界憲章』と『フマーネ・ヴィテ』に照らして、良心的産児(責任ある親)について考えてみたいと思います。

公会議の文章はこのテーマについて、基本的な前提を述べるにとどめていますが、『フマーネ・ヴィテ』の方では、さらに一歩踏み込んで基本的な前提の具体的内容を示してくれています。

公会議文書の51番は次のように述べています。「夫婦愛と生命伝達の責任との調和が問題となるときには、行為の倫理性は意向の純粋性や動機の評価だけに依存するのではない。それは人間とその行為の本性から引き出された客観的規準、真の愛の関連において相互授与と人間繁殖の十全な意味を守る規準によって定められるべきである。」　さらに、「教会の子供はこれらの原則に従うべきものであるから、受胎調整(産児制限)に際しては、神の掟を説明する教会の教導職が禁止する手段を用いてはならない」と。(『現代世界憲章』51)

良心に従う

いま引用した言葉の少し前で、公会議は、「夫婦は……人間として、キリスト者としての責任をもって、自分の務めを果たすべきであり、神に対する敬いの心で……正しい判断

不変の教え

を下さなければならない。(『現代世界憲章』50) そのためには「双方が共に与え、努力を傾けなければならず、自分自身の善のみならず、生まれた子供、生まれるであろう子供の善を考慮し、自分の生活状態ならびに、時代の精神的、物質的状態を識別し、家庭、社会、教会それぞれの利益を考えなければならない」(同上50) と教えています。

ついで、「良心的産児」(責任ある親) の倫理的性格を正しく決定する、大切な点があきらかにされます。すなわち、「この判断は、最終的には夫婦自身が神の前において下すべきである」(同上50) と。

同じ50番はさらに良心について話を進め、「自分の行為に関して、キリスト者である夫婦は自分勝手に処置できないことを知るべきである。かれらは常に良心に従わねばならず、良心は神の掟に従わねばならない。また彼らは神の掟を福音の光のもとに正しく解釈する教会の教導職に従順でなければならない。神の掟は夫婦愛の十全な意味を示し、守り、その真に人間的な完成へ導くからである」(同上50) と述べています。

公会議の文章は、「良心的産児」(責任ある親) に必要な前提となるものを思い出させるにとどめてはいますが、極めて明確にそれら前提を提示し、また、「責任ある親」の構成要素と呼ぶべきもの、すなわち、教会教導職が真正に解釈する神法に関して、それぞれが自らの良心に照らしてしっかりと判断すべきことを説明しています。

ほんとうの夫婦愛

回勅『フマーネ・ヴィテ』は、公会議文書と同じ前提を踏まえながら、もう一歩踏み込み、具体的な提示を与えています。この点は「良心的産児」の定義の仕方に(『フマーネ・ヴィテ』10) 顕著にあらわれています。

パウロ六世は、「責任ある親」(良心的産児) について色々な面から検討し、前もって産児制限のみについて問題にしようとする人々の部分的な考え方を排除しています。事実、最初から、「人間とは」(同上7参照) および「夫婦愛 (同上8と9参照) とは」という根本的問題を常に念頭においた検討を進めています。

様々な面から

親の役割を果たす責任について述べるには様々な面を考慮に入れなければなりません。パウロ六世は次のように書いています。「まず生物学的過程の点からみれば、良心的産児 (責任ある親) は、それらの機能を知り、またそれを尊重することを意味します。なぜなら、人間理性は生命産出の能力の中に、人格 (ペルソナ) の構成にあずかる生物学的法則に見いだすからであります。」(『フマーネ・ヴィテ』10) 一方、「本能と感情の傾きの観点」を検討するなら、「良心的産児」は、それらに対して理想と意志が行なうべき必要な制御を意味しています。(同上10)

これら個人的な面については言うまでもなく、加えて「経済的、社会的条件」を考えるなら、「熟慮とひろい心をもって多数のこどもをもうけようとする者も、また、まじめな理由から、倫理の法則を守りながら、一定または不定の期間にわたって妊娠を避けようとする者も良心的産児を行なっている」(同上10) と言えるのです。

こういうわけで、「良心的産児」(責任ある親) の概念は、単に「子供の産出」を避けるだけではなく、熟慮の上でこどもを増やすという面を含んでいることがわかります。この見地から「良心的産児」(責任ある親) の問題を検討し、決定すべきですが、その際、「神がお定めになった客観的倫理規準がすこぶる重要になります。この規準を真正に解釈できるのは正しい良心です。」(同上10)

責任ある親 (良心的産児) を行使するためには、「神に対し、自分自身に対し、家庭に対し、また人類社会に対する自分の義務」(同上10) を果たさなければなりません。それゆえ「自分勝手」はゆるされないのです。かえって夫婦は、「創造主である神の意志にその行動を合致させなければなりません。」(同上10) この原則を始めとして、回勅の基盤は、すでに述べたように、「夫婦行為の親密な構造」および「夫婦行為における二つの意義の不可分なつながり」(同上12参照) に根本をおいています。従って、夫婦の倫理性の原則とは、「夫婦行為の親密な構造」と「夫婦行為における二つの意義の不可分なつながり」に明示された神の計画への忠実であると言うことができます。

(一般謁見　一九八四・八・一)

默想のしおり ❷

聖　体

すでに私は告解の秘跡と聖体の秘跡との間にある密接なつながりについてみなさんの注意をひいた。《悔い改めは聖体に導くのみならず、聖体は悔い改めに導く。》聖体拝領においてお受けするのはどなたであるかを自覚するなら、ほとんど自然に我々の罪に対する悲しみと内的浄化の必要を感じると共にみずからの不肖を悟ることができる。

キリスト信者はご聖体を通してのみ、英雄的に諸徳を実行することができる。すなわち、敵を愛し、苦しみを与える者さえも愛し、隣人のために自分の生命までささげる愛徳、年齢、境遇を問わない貞潔な生活、歴史や人生の舞台で神の沈黙に当惑するときや、特に苦痛における忍耐、など。それゆえ、正真正銘のキリスト信者であるために、いつもご聖体を大切にする人であって欲しい。

ご聖体は、教会の中で各時代に十字架の犠牲をつたえる「中継局」とも言うべき秘跡である。

聖　母

十字架につけられた御方の御母ほど、十字架の秘義を、神の超越的正義と驚くべき愛との出会いを、いつくしみから正義に与えられた「口づけ」(詩篇85(84)・11) を、深く体験した人はほかにない。だれもマリアほどにこの秘義、カルワリオ上のあがないの、真実、神的な深さを、心に受け入れた人はなかった。あがないは、御子の死によって、母の心のいけにえと共に、母の決定的な「なれかし」と同時に成し遂げられたのだ。

教会が昔から伝えてきた信心のわざを大切にしよう。お告げの祈り、五月の聖母月、とくにロザリオの祈りを！　素晴らしい習慣である、家族そろって唱えるロザリオが再び多くの家庭で復活せんことを。

聖母マリアをみなさい。マリアを愛しなさい。神に対して完全にひらかれた聖母の心にならいなさい。聖母はご自分の態度について言っておられる。私は神のみ心のままに仕えるめしつかいであると。

エリザベトの喜びようは、神で一杯になった心から出るあいさつであれば、たとえ簡単な言葉であっても、すばらしい賜を内に秘めていることを教えてくれる。孤独の暗闇につつまれた重い心も、一条の光にたとえられる微笑みや親切なことばのおかげで、すぐに晴れ晴れとするものだ。

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部七十円送料四十円　■一年予約八〇〇円送料五〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
神戸
3-72393